

オ四話 びっくり学級の巻

ヒゲオヤジはお茶の水小学校の教師。登校  
の途中、四部垣とタマオが、ロホットの人杖  
宣言について、ロゲンカを合っているのを  
とめる。四部垣はじめ、クラスの何人かは、  
ロホットが人杖とおなじ教鞭を持つなんて、  
かまんできないのだ。ヒゲオヤジは、実は今  
日ロホットと同級生がひとりクラスにまると  
とも知らせ、決して差別しないように命じる。  
そして、その日、お茶の水博士に連れられ  
てアトムが入学へ迎れた。五年A組へ編入。  
教室で、おこちなく生徒達に挨拶したあと、  
あから五番目ータマオの隣に坐ることにな  
る。  
最初はおさまづく、そのあと、タマオが話し  
かけたのをききつけ、ハト派の生徒たちは  
アトムに好感を持つようになる。  
ただ、四部垣とその仲間たちは、ことごと

にアトムを軽蔑し、いやがらせをぶつける。  
そういう時、アトムはひとりぼっちで学校の  
裏の公園に坐って悲しむのだった。

アトムを見守っているセゲオアジはアトム  
まいじめている連中ロボットに対する愛情をもたせたいと考  
え、ロボットたちと相談した。

ある日四部垣や大福は、アトムの力を利用  
して栗拾いに山へ出掛けた。アトムとつまあ  
ってやるといいう代償に、山や甲うの栗や柿を  
とってまさせる条件だ。幾つも山を荒らし廻

っているうち道に迷ってしまった。

やがて、一行はまっくらなトンネルをくぐ  
って別世界のような所へ出た。疲れぬて、

学校のような建物の中へはいると、なんと、  
そこは先生も生徒もロボットの学校で、一行

はそこでロボットたちに軽蔑され、ロボット  
的なむちやくちやな授業を強制されるの知っ

た。先生の話で、なぜか一行は一年とび  
こえた30世紀の世界へ来てしまっていたこと

かつかつた。そこで人は人間はほとんど滅び

ロボットたちが支配をしているのだ。

四部垣たちは、アトム一人が頼りだった。

アトムはじよげ返っている一行をばげまして、もとのトンネルを探した。やっとトンネルを

発見してもこの世界へ戻ったとき、四部垣はアトムに感謝するほかなかった。

三十世紀にロボットが人間を支配するおそろしさ。そしてロボットの学校に人間がまじ

ることの心細さ。四部垣は、学校へ帰ってもすっかりアトムに對しておとなしくなっている

に。

ヒゲオヤジは、ベイリーや、その他のロボ

ット利団の連中とひそかに祝盃をあげた。なにもかもヒゲオヤジの演出で、彼がでっち上

げた芝居だったのだ。もちろんトンネルのむこう側の学校は、発電所のことや丸丸建物で、

そこに役者たちが生徒や先生のかりをして、四部垣たちを迎え入れたのだ。